

『吉備巨大古墳の謎 - 吉備王権は存在したか』

1996.4.27。(土)

1. 吉備の巨大古墳：

(造山古墳の大きさ)

岡山市の北西部の新庄下・新庄上に位置する造山古墳は、吉備第1位の規模をほこる古墳です。

3段築成の前方後円墳で、古墳の長さは357m。後円部の直径は206m、高さは32.5m、前方部の幅は232m、高さ27mで、くびれ部の左右に作り出しが設けられています。

もちろん、吉備（岡山県～広島県）第1位の古墳であるだけでなく、全国的に見ても、伝仁徳天皇陵古墳（486m）・伝応神天皇陵古墳（425m）・伝履中天皇陵古墳（365m）につぐ、第4位の規模の古墳です。そのあまりの大きさに、本物の山と見間違えてしまう人が多いという冗談（?!）のような話もあるそうです。

確かに今でこそ、うっそうとした木々に埋もれてしまっていますが、本来の形を想像すれば、当然に木々は一本もなく、墳丘には葺石が敷き詰められた「白い」石の丘だったわけですし、おそらく数千本に及ぶ円筒・形象埴輪も並べられていたのです。そんな「つくりやま」が、平野の中に存在する風景こそは、大和の王権に匹敵しうる強大な権力をもった吉備の力を表すものにほかなりません。

この古墳は、これまでに発掘調査は実施されたことがありませんから、その詳しいことはわかっていません。けれども、古墳から採集された円筒埴輪の年代から、5世紀の前半、さらにいえば第1四半紀に築かれたものであると考えられています。また、この古墳の回りには現在のところ周濠は確認されていませんが、近年の研究により、幅20m程度の濠と30m強の堤の存在が唱えられています。もしも、これらの濠や堤まで含めると、古墳の全長は470m余りであったこととなります。

これほどに大きな古墳であったわけですから、この造山古墳については、単に吉備の首長の墓というレベルではなく、全国レベルでの「倭」の首長の墓と考えるべきではないか、と主張される研究者もあります。

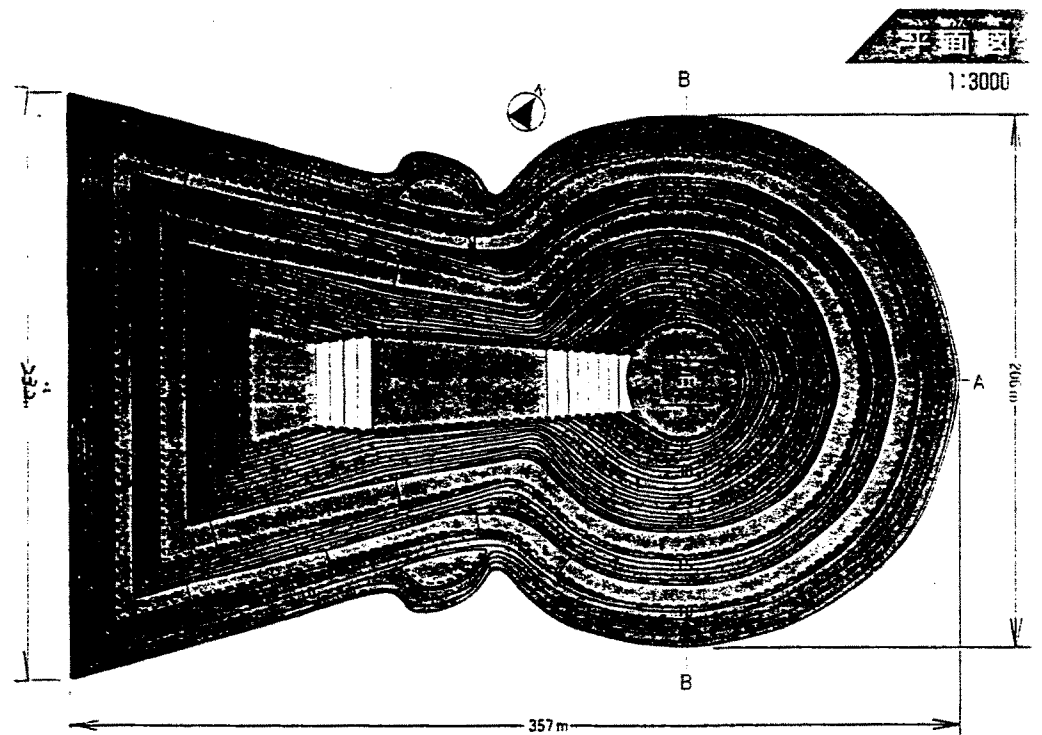
確かにこれだけの古墳を築くのに必要な労働力を考えると、はたして吉備の勢力だけで可能であったのか、という疑問も生まれてきます。

ある試算によると、この造山古墳を築くのに必要な労働力はのべ150万人分になるそうです。古墳の築造は、立ち木の伐採から整地・盛土、葺石・埴輪づくり、石室・石棺づくりなど、さまざまな工程を必要とします。そこには、高度な土木技術や製作技術も必要不可欠と考えられますから、現代でいう「国家

造山古墳 復原想定図

古墳築造工事の数量と必要延べ人数 (株大本組、高橋護、高原克人氏調べ)

工種	小工種	数量	延べ人数(人)
立ち木の伐採		261,000m ²	8人編成で1日あたり140m ² 15,000
地山の表面削り	表面から約30cm上を採取	122,000m ²	8人編成で1日あたり40m ² 24,000
段切り		65,000m	11人編成で1日あたり80m 9,000
盛り土	古墳南側の丘陵地より寄土を採取	270,000m ³	11人編成で1日あたり20m ³ 145,000
	運搬	270,000m ³	11人編成で1日あたり5m ³ 594,000
	均等に土を盛り、それを締め固める	270,000m ³	11人編成で1日あたり90m ³ -34,000
斜面の整形		46,000m ²	11人編成で1日あたり100m ² 5,000
葺石	足守川上流で採取	9,200m ³	11人編成で1日あたり7m ³ 14,000
	採取場所から14kmを舟で水上運搬	9,200m ³	5人編成で1日あたり1m ³ 42,000
	陸上二次運搬 (舟着き場から仮築場までの1km)	9,200m ³	積み込み11人編成で1日あたり18m ³ 運搬 13人編成で1日あたり1m ³ 105,000
	陸上三次運搬 (仮築場から作業場までの200m)	9,200m ³	積み込み11人編成で1日あたり18m ³ 運搬 11人編成で1日あたり5m ³ 26,000
	葺石敷	46,000m ²	13人編成で1日あたり30m ² 20,000
周濠づくり		15,000m ²	掘き・運ぶ・締め固める作業を1人 1日あたり0.8m ² 19,000
石室敷き		9,800m ²	掘き・運ぶ・締め固める作業を1人 1日あたり0.5m ² 21,000
石砂利敷き		2,800m ²	掘き・運ぶ・締め固める作業を1人 1日あたり1.0m ² 3,000
埴輪づくり		5,100個	1個あたり17人 87,000
石室づくり		1式	香川県の豊島から舟で約60kmを海上輸送し、陸上船は終端で運ぶ 5,000
石棺運び		1式	坂本真木市から陸地沿いを約700km海上輸送 3,000
計			1,173,000
工具の作成など			350,000
を 計			1,523,000



的プロジェクト」であった可能性も否定できません。

もちろん、吉備の労働力を集中的に使役することによって、築造は可能であるとする有力な見解も存在しますので、ただちにこの造山古墳が「倭」の王の墓であると結論することはできません。しかし、吉備全体に目を向けて見ますと、同時期の巨大な古墳の造営は他の地域では見られない、という点を指摘することはできます。

（吉備の勢力と造山古墳）

岡山県と広島県の東部を含む、「吉備」にはすでに弥生時代の終末である3世紀の後半の段階で、盛り土をもった、首長の墓と呼べる大きな墓が作られています。

そして、古墳時代の始まりである、3世紀の後半から4世紀の初頭にかけて、いくつかの複数の地域で100mクラスの前方後円墳が築かれているという特色があります。

これらの古墳に葬られた首長は、水系・盆地・平野といった自然地形から生まれる地域的なつながりをもったいくつもの集落をまとめるリーダー的な存在として、古墳築造のための労働力の使役・他地域との交流をおこなっていたのだと考えられますし、最近の研究では「前方後円墳体制」とも呼びうる、広い範囲での外的な権力関係をバックとした「権威」でもあったことが主張されています。

ところが、古墳時代の前期である4世紀代を通じて、これら初期的な権力が存在した地域では、大型古墳の築造は次第に数が少なくなります。そして、そのあとに5世紀の巨大古墳である、造山古墳の築造を迎えるのです。

このことは、古墳時代の始まりから、吉備の内部で勢力の淘汰がなされ、結果として造山古墳に象徴される統一的な権力が生み出されたことを想像させるものです。この点でも、造山古墳は吉備において重要な古墳であるといえるわけです。

（造山古墳以後—作山古墳と宿寺山・両宮山古墳）

この造山古墳につぐ時代の、吉備の大首長の大型古墳としては、総社市の作山古墳があげられます。

作山古墳は全長286m、吉備第2位の古墳で、全国的にも第9位の大きさのものです。採集されている埴輪から、その築造は、5世紀の前半、第2四半期と考えられています。

この古墳は、規模そのものは吉備以外の他の地域と比べても遜色のない、大型古墳ですが、造山の巨大古墳につぐものとしては格段に規模が小さくなることを指摘せざるを得ません。

また、この作山古墳につぐものとしては、同じく総社市の宿寺山古墳と、山陽町の両宮山古墳とがあげられます。それぞれに全長118m、192mと大型の古墳ではありますが、規模のさらなる縮小と、吉備の中で備前と備中とにそれぞれ存在することから、吉備勢力の分裂と権力の縮小を示している古墳である、といわれています。

これ以後、隆盛を誇った吉備の地域であっても、大型古墳の築造はさらに少なくなっていくと見えます。5世紀の後半から6世紀にかけて見られるこの変化は、特に吉備特有のものではなく、ほぼ全国的な傾向であるともいえますが、造山ほどの古墳を築きえた勢力としては、その落差に何らかの政治的な変化を感じずにはられません。

2. 吉備の反乱伝承：

（3つの反乱伝承）

吉備の勢力の大きさを逆説的にもの語るのが、「日本書紀」の伝えるいわゆる「吉備の反乱伝承」です。

畿内の王権に匹敵するほどの勢力をもった吉備との対立と抗争を描いた「反乱伝承」は、雄略紀におさめられています。

まず登場するのが、雄略7年8月の条に見える、吉備下道臣前津屋（さきつや）の反乱です。

当時、宮廷に「官者（とねり）」としてつかえていた、吉備弓削部虚空（おおぞら）が、所用があって吉備に帰ったところ、前津屋が自分の下に留め使い、雄略へ返さなかったのです。

そこで、雄略は美濃地域の豪族である身毛君大夫（むげつのきみますらお）を派遣して、虚空を連れ返しました。戻って来た虚空は、雄略に対して、つぎのような話をします。すなわち、前津屋が反乱の意志を抱いて、女性相撲や闘鶏の勝敗でその成否を占ったところ、自分に見立てた側が負けたので、雄略に見立てたほうの女性や鶏を殺してしまったと。

これを聞いた雄略は、物部の兵士30人を派遣して、前津屋とその一族70人を皆殺しにしてしまった、というものです。

つぎの伝承が、雄略7年是年条にのせられている、吉備上道臣田狭（たさ）の反乱です。

田狭は、宮廷で妻の稚媛（わかひめ）がいかにすぐれた女性であるかを自慢しました。これを聞いた雄略は、田狭を「任那国司」に任じて国外に追いやった後に、稚媛を奪ったのでした。任那でこれを知った田狭は、当時、雄略と敵対関係にあった新羅へ向かいます。

一方、雄略は、新羅を征服しようとして、田狭と稚媛とのあいだに生まれた弟君（おとぎみ）と吉備海部直赤尾を派遣します。弟君らは新羅に攻め入ろう

としますが果たせず、百済の技術者を集めて大嶋に留まっていた。その大嶋にある弟君に田狭は使者を送り、ともに朝鮮半島南部を拠点にして雄略に対抗することを勧めます。

ところが、これを知った弟君の妻である樟媛が、夫を殺して反乱の根を断ってしまう、といものです。

最後に第3の反乱伝承として、雄略の死後、清寧即位前紀に記されている星川皇子のものがああります。

星川皇子は、かつて田狭の妻であった稚媛が雄略との間に生んだ皇子でした。雄略の死後、稚媛は星川皇子を大王の位につけようとしています。そして、星川に勧めて諸国からの貢ぎ物を収納する大蔵を占領させて、クーデターを起こさせるのです。

けれども、雄略の遺命を受けていた大伴室屋などに包囲され、星川皇子・稚媛らは焼け死んでしまいます。このとき、吉備出身の女性の生んだ皇子の挙兵を聞いた吉備上道臣らは、水軍を率いて応援しようとするのですが、途中で星川が焼き殺されたことを知り、本国に引き返します。

大王として即位した清寧は、この吉備上道臣らの行動を責めて、その支配する山部を奪った、というのです。

以上の反乱伝承が、日本書紀の伝えるとおり、雄略の時代の出来事であったかどうかについては、疑問が出されていますが、少なくとも、吉備と畿内とのあいだに政治的な緊張関係が存在したことは確実である、と考えてよいのではないのでしょうか。

(反乱伝承の伝えるもの)

それでは、これらの「反乱伝承」はどのような歴史的事実を投影しているのでしょうか。

まず、前津屋の反乱ですが、ここに伝えられている行為そのものは呪術的なものに留まっています。しかし、弓削部虚空が前津屋に留め使われたとする記述には注目されます。すなわち、本来は下道臣に従属しているはずの弓作りの一団が、畿内の王権につかえていることになるのですから、このことは2つのことを表していると考えられます。

1つは、吉備の大規模古墳を築造するような首長の下で、直接に大和との関係をもつに至った中小の首長層があったという、吉備の勢力の中の2重構造。もう1つが、そうした構造に対する吉備と畿内との敵対意識、です。

つまり、この前津屋の伝承には、5世紀後半における吉備の社会の内部での首長層の対立と、その矛盾を使用した畿内の王権の勢力の伸展が読み取れるのではないのでしょうか。

つぎに、田狭の反乱ですが、ここでは朝鮮半島との関係が注目されます。

雄略の時代を中心として、東アジアの世界に「倭」がその権力を延ばそうとする動きが活発に見られます。そして、朝鮮半島への軍事活動において、吉備一族はしばしば派遣の将として登場するのです。これに課せられた経済的・軍事的負担が、その反乱の要因のひとつとなったことは十分に考えられることです。と同時に、吉備が朝鮮半島の南部に独自の密接な交流をもっていたことも見逃せません。

また、書記の分注には、田狭の妻は実は葛城氏の娘であり、雄略は田狭を殺してその娘を奪った、とも書かれています。雄略は大和の諸豪族を打倒して王権を確立したといわれていますから、圧迫を受ける伝統的な有力豪族の葛城氏と、婚姻を通じての吉備氏との同盟を想起させる書記分注の記載は、畿内と同様の、大王勢力と吉備の勢力との敵対関係・緊張関係があったことを裏付けるものともいえます。

そして、星川皇子の反乱ですが、これはまさしく、王位の篡奪の物語であるところに特長があります。

それはひるがえって、吉備氏が畿内の王権の中で占めていた地位の高さをも物語ります。そして、畿内の王権によって、政治的な圧迫の度合いを強めていた吉備にとって、いつかは起こりうる「反乱」であったともいえます。

(大王の支配下の吉備へ)

こうして、造山古墳に象徴される吉備の政治的な統一は、畿内の勢力による干渉・圧迫によって解体の道をたどることとなります。吉備の巨大古墳の動向は、そうした一連の流れに相呼応するようにも考えられます。

しかし、吉備が完全に畿内の支配の下に組み込まれてしまった、「地域勢力」のひとつに押さえ込まれた、と即断するのは早いような気がします。

例えば、6世紀の半ばになっても、石室の長さ19mをはかる真備町の箭田大塚古墳や、全長100mの前方後円墳であるこうもり塚古墳など、権力を誇示する遺跡を吉備は、その中央部に残しています。

また、飛鳥期の寺院の建立が早くも認められ、つぎの白鳳期には、「吉備寺式」と呼ばれる独特の文様の瓦をもつ寺をはじめ、30以上の寺院が確認されているのです。

これらのことは、吉備の政治的勢力は、たしかに畿内の王権と並立するものにはならなかったが、地方の有力豪族として、「吉備王権」の残映を根強く残していることの証しではないのでしょうか。

- ・参考文献 「日本の古代6 王権をめぐる戦い」 中央公論社 1986
「古代史を歩く4 吉備」 毎日新聞社 1987
「吉備の考古学的研究」 山陽新聞社 1992

日本書紀・雄略天皇（七年）八月に、吉備言削部虛空取急に家に歸る。吉備下道臣前津屋、或本に云はく、國造吉備臣山といふ。虛空を留め使ふ。月を経るまで京都に聴し上らせ肯へにす。天皇、身毛君大夫を遣して召さしむ。虛空召されて來て言さく、「前津屋、小女を以ては天皇の人に、大女を以ては己が人にして、競ひて相闘はしむ。幼女の勝つを見ては、即ち刀を抜きて殺す。

復小なる雄鷄を以て、呼びて天皇の鷄として、毛を抜き翼を剪りて、大なる雄鷄を以て、呼びて己が鷄として、鈴・金の距を着けて、競ひて闘はしむ。禿なる鷄の勝つを見ては、亦刀を抜きて殺す」とまうす。天皇、是の語を聞しめて、物部の兵士三十人を遣して、前津屋并せて族七十人を誅殺さしむ。

是歲、吉備上道臣田狹、殿の側に侍りて、盛に稚媛を朋友に稱りて曰はく、「天下の醜人は、吾が婦に若くは莫し。茂に紳にして、語の好備れり。暎に温に、種の相足れり。鉛花も御はず、蘭澤も加ふる事無し。曠しき世にも備罕ならむ。時に當りては、獨秀れたる者なり」といふ。天皇、耳を傾けて遙に聴しめして、心に悦びたまふ。便ち自ら稚媛を求きて女御としたまはむと欲す。田狹を拜して、任那國司にしたまふ。俄ありて、天皇、稚媛を幸しつ。田狹臣、稚媛を娶りて、兄君・弟君を生めり。別本に云はく、田狹臣が婦の名は毛媛といふ。葛城麻津彦の子、玉田宿禰の女なり。天皇、稚媛を寵ししと聞しめて、夫を殺して自ら幸しつといふ。田狹、既に任所に之きて、天皇、其の婦を幸しつることを聞きて、嬖を求めて新羅に入らむと思欲ふ。時に、新羅、中國に非へず。天皇、田狹臣の子弟君と吉備海部直赤尾とに詔して曰はく、「汝、往きて新羅を勸て」とのたまふ。是に、西渡才伎敷因知利、側に在り。乃ち進みて奏して曰さく、「奴より巧なる者、多に韓國に在り。召して使すべし」とまうす。天皇、群臣に詔して曰はく、「然らば、敷因知利を以て、弟君等に副へて、道を百濟に取り、并せて勅書を下ひて、巧の者を獻らしめよ」とのたまふ。是に、弟君、命を御りて、衆を率て、行きて百濟に到りて、其の國に入る。國神、老女に化爲りて、忽然に路に逢へり。弟君、就きて國の遠さ近さを訪ぬ。老女、報へて言さく、「復一日行きて、而して後に到るべし」とまうす。弟君、自づから路遠きことを思ひて、伐たずして還りぬ。百濟の貢れる今來の才伎を大嶋の中に集聚へて、風候ふと稱ふに託けて、淹しく留れること月數ぬ。任那國司、田狹臣、乃ち弟君が伐たずして還ることを喜びて、密に人を百濟に使ひて、弟君に戒めて曰はく、「汝が領項、何の牢網有りてか人を伐つや。傳に聞く、天皇、吾が婦を幸して、遂に見息見息は、日に上の文に見ゆ。を有つと。今恐るらくは、禍の身に及ばむこと、足を蹠て待つべし。吾が兄汝は、百濟に跨え據りて、日本にな通ひそ。吾は、任那に據り有ちて、亦日本に通はし」といふ。弟君の婦、國家の情深く、君臣の義、切なり。忠なること自日に諭え、節背松に冠きたり。斯の謀、叛を惡みて、遂に其の夫を殺して、室の内に隠し埋みて、乃ち海部直赤尾と與に百濟の獻れる手末の才伎を將めて、大嶋に在らふ。天皇、弟君の不在ことを聞しめて、日鷹吉士堅磐固安鏡、堅磐、此をば柯陀之波と云ふ。を遣して、共に復命さしめたまふ。遂に即ち倭國の吾嶋の廣津、廣津、此をば比應岐頭と云ふ。邑に安置らしむ。

む。病みて死者、衆は。是に山出て、天皇、大伴大連室屋に詔して、東漢直掬に命せて、新漢陶部高貴・鞍部堅貴・書部因斯羅我・錦部定安那錦・譯語卯安那等を、上桃原・下桃原・眞神原の三所に遷し居らしむ。或本に云はく、吉備國新羅、百濟より還りて、澤手入部・衣織部・安人部を獻るといふ。

日本書紀・清寧天皇 即位前紀 二十三年の八月に、大泊瀬天皇、崩りましぬ。吉備稚媛、陰に幼子屋川皇子に謂りて曰はく、「天下之位登らむとならば、先づ大藏の官を取れ」とのたまふ。長子磐城皇子、母夫人の、其の幼子に教ふる語を曉きて曰はく、「皇太子、是我が弟なりと雖も、安にぞ欺くべけむ。不可爲」とのたまふ。星川皇子、聴かずして、輒く母夫人の意に隨ふ。遂に大藏の官を取れり。外門を鎖し閉めて、式で難に備ふ。權勢の自由にして、官物を費用す。是に、大伴室屋大連、東漢掬直に言ひて曰はく、「大泊瀬天皇の遺詔し、今至りなむとす。遺詔に従ひて、皇太子に奉るべし」といふ。乃ち軍士を發して大藏を圍繞む。外より拒ぎ閉めて、火を縱けて燔殺す。是の時、吉備稚媛・磐城皇子の異父兄君・城丘前來自名を馳せり。星川皇子に隨ひて、燔殺されぬ。惟に河内三野縣主小根、慄然ち振怖きて、火を避りて逃れ出づ。草香部吉士漢彦が脚を抱きて、因りて生きむことを大伴室屋大連に祈さしめて曰さく、「奴縣主小根、星川皇子に事へまつりしことは、信なり。而れども皇太子を背きたてまつること有ること無し。乞ふ、洪恩を降して、他の命を救ひ賜へ」とまうす。漢彦、乃ち具に爲に大伴大連に啓して、刑類に入れず。小根、仍りて漢彦をして大連に啓さしめて曰さく、「大伴大連、我が君、大きな慈恩を降して、促短れる命、既に續ぎ延長へて、日の色を観ること遊たり」とまうす。輒ち難波の來自邑の大井戸の田十町を以て、大連に送る。又田地を以て、漢彦に與へて、其の恩を報ゆ。

是の月に、吉備上道臣等、朝に亂を作すと聞きて、其の國に生まれせる星川皇子を救はむと思ひて、船師四十艘を率て、海に來浮ぶ。既にして燔殺されぬと聞きて、海より歸る。天皇、即ち使を遣して、上道臣等を噴議めて、其の領むる山部を奪ひたまふ。

吉備古代史年表

中国	秦	漢	前漢	新	後漢	西	晋
朝鮮	無文土器						原三國
年代	B.C. (紀元前)			0	57	A.D. (紀元後)	
日本	前期		中期		後期		
おもな事柄	環濠集落がつくられる		この頃から(古墳時代にかけて)ガラスの廃業がみられる		分銅形土製品の使用が盛行する		
吉備関連の遺跡名	高尾遺跡	百間川沢田遺跡	龜山遺跡	門田貝塚	百間川原尾島遺跡	高田遺跡	南方遺跡
					四辻遺跡	丘陵上に墳墓がつくれ始める	倭奴国王後漢に朝貢
					高地性集落出現	吉備南部において石器急激に減少	単弥呼説に使者を送る
					貝殻山遺跡	大形の墳丘墓と埴輪の祖型となる特殊壺・特殊器台出現	大形の墳丘墓と埴輪の祖型となる特殊壺・特殊器台出現
						土器の移動顕著	土器の移動顕著
						前方後円墳出現	前方後円墳出現
						特殊器台形埴輪が樹立される	特殊器台形埴輪が樹立される
						多数の三角縁神獸鏡が副葬される	多数の三角縁神獸鏡が副葬される
						備前車塚古墳	備前車塚古墳

中国	晋	東	五湖十六国	南	北	朝
朝鮮	原三國					
年代	400					
日本	前期		中期		後期	
おもな事柄	滑石製模造品の多量副葬がみられるようになる		巨大古墳の造営		吉備権臣・吉備上道臣の反乱伝承	
吉備関連の遺跡名	天神山古墳	花光寺山古墳	鶴山丸山古墳	金蔵山古墳	月輪古墳	造山古墳
						千足古墳
						横穴式石室の導入
						吉備下道臣前津屋の反乱伝承
						吉備上道臣田狭の反乱伝承
						朝鮮からの渡来人により新しい技術・文化伝来
						倭王武、上表文を宋に奉る
						備前高島遺跡
						荒神島遺跡
						桑山古墳
						四ツ塚13号墳
						木鍋山1号窯
						児島の屯倉設置
						白猪の屯倉設置
						巨石墳の造営
						横穴式石室を内部主体とする群集墳盛行
						美作を中心に陶棺の使用が盛行する
						塚山古墳群コウデン1号墳
						佐良山古墳群
						緑山古墳群
						半佐大塚古墳
						箭田大塚古墳
						江崎古墳
						こうもり塚古墳